

「MMT や消費税反対などを主張している西田先生は党内でどのくらい孤立しているのでしょうか？」

令和2年1月8日

● Yさんからの質問

MMT や消費税反対などを主張している西田先生は党内で孤立無援、四面楚歌の状況であると察しますが、実際どのくらい孤立しているのでしょうか？自民党内の経済認識の酷さについて語っていただきたいです。答えにくいと思いますがお願いします笑。

● 西田昌司の答え

「政府は積極的に財政出動をすべし」といった意見を、党の役員会や国会（安倍総理や麻生財務大臣に直接質しています）といった場のみならず、YouTube 上で（週刊西田のような）自分のチャンネルを作って国民に発信している自民党の議員は、私以外にはほとんどいないでしょう。しかし、だからといって私は党内で孤立しているとは思いません。

私の考えを頭から否定する議員がいるのも事実ですが、一方、私の考えを理解する議員も少なからずいます。デフレ下の現在において消費税を上げるべきでないことを多くの議員は理解していますし、（自国通貨建て国債をいくら発行したところで財政破綻するはずがないと主張する MMT の考えに従って）財政出動を増やすべしと考える議員も少なくありません。そのような「わかっている」議員が何故私のように声を大にして主張しないかということ、理解度がまだまだ浅くて公言するには至っていないという側面があるのでしょうか。

（私の書いた『財務省からアベノミクスを救う』をはじめとして、いくつ

かある) MMT に関する本の一冊でも読めば MMT の概略は理解できますし、そうすれば「日本には財政問題は存在しないし、消費税を上げる必要は全くない」という結論に簡単に至るはずですが、しかし、政治家は多忙なこともあって本をあまり読みませんし、そのような勉強不足の議員は財務官僚から「MMT は出鱈目です」と簡単に洗脳されてしまいます。本を読んで自分の頭でしっかりと考えれば MMT を理解できるのに、その当たり前の努力をしないのは困ったものです。

国会議員は朝から晩まで仕事が詰まっています非常に忙しい職業です。朝 6 時には起きて朝 8 時から始まる会議に出席をし、陳情を受けたり、様々な法案の説明を受けたりと休む暇もなく一日が終わってしまいます。まとまった時間がとれずになかなか本をじっくりと読むこともできないのですが、それでも時間を見つけて本を読もうと思えば読めるはずですが。

私の場合、京都と東京の間を新幹線で毎週行き来していますが、その間に本を読んだり等の様々なインプットをしています。また、国会対策委員会の委員長代行という役を務めていて、朝から晩まで国対の部屋に待機して色々な相談を受けたりしますが、その合間に本を読んだり考えたりして時間を無駄にしていません。そのような努力をすることによって、私程度の人間であっても色々なことが理解できるようになります。色々なことを吸収したいという心構えさえあれば少ない時間を有効に使うことができるのです。

学者は議員とは違って本を読む時間はあるでしょうが、主流派経済学者と呼ばれる人達の MMT に対する理解の悪さは、(多忙のために真実を追求できない国会議員とは違って) また別の深刻な側面を孕んでいます。彼らは主流派 mainstream であるとのプライドがあるために、(MMT の正しさを心の底ではわかっていながらも) MMT を認めてしまうとこれまで主流派であった自分達の立場がなくなって単なる曲学阿世の徒に成り下がってしまうので見て見ぬふりをしよう、という保身の心理が働いてしまうのです。

主流派経済学は「経済的現象は全て数式で表すことができる」との経済観

に立っています。例えば、「モノを作れば必ず売れる」と主張する「セーの法則」という理論がありますが、モノを作ったところでそのモノを購入する人がいなければ売れ残ってしまうのは誰にでもわかる話ですし、こんなものは現実から激しく乖離した空論でしかありません。モノを買う・買わないといった人の嗜好に関することを数式で完璧に表すことなどできるはずがありませんが、何でも数式で表すことができるという主流派経済学のポリシーには反します。ですから、作ったモノは必ず売れるという非現実的な前提を置くわけです。主流派経済学は、都合の悪いものから目をそらすことに慣れてしまっていますから、MMT といった正しい経済学が出現してもそんな学説はないがごとく無視するわけですが、これでは真実を追求する学者の態度とは言えません。

「主流派経済学の学者に限らず、どんな世界であってもこれまでと違う見方に対しては（たとえ正しくとも）なかなか受け入れられないのでは？」との擁護する声が聞こえてきそうですが、必ずしもそうではありません。医学の世界を例に挙げると、ピロリ菌が胃ガンの原因と判明した途端に胃ガン予防のやり方が根本的に変わってしまいました。かつては、胃酸の強い胃の中で生きられる細菌など存在するはずがない、と思われていましたが、ピロリ菌という細菌の存在が明らかとなり、さらにそのピロリ菌が胃ガンの原因となるという新事実が明らかとなったのです。ピロリ菌の駆除が胃ガン予防に効果的であると判明するやいなや、ピロリ菌除菌療法がすぐさま導入されて、その結果として胃ガン発生が激減したのです。一方、主流派経済学という学問の世界に生きるいわゆる学者は、ただただ自らの地位にしがみつくばかりで学者としての誠実さを全く失っており、もはや学者ですらありません。

デフレが 20 年以上も続いてしまった現在、経済のかじ取りをしてきた財務官僚や（財務官僚に入れ知恵をしてきた）主流派経済学者が間違っているということに多くの人が気づき始めてきました。そういった人達が本を読む等して自分の頭で考え始めることで、世の中は一気に変わるでしょう。私は決して孤立しているとは思いませんし、むしろ（議員も含めて）仲間がどん

どんと増えてきていると感じています。令和の御代がそういった気付きの御代となるよう、私もこの一年間頑張る所存です。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>